

東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第 四 號 第 十 八 卷

大正十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論 叢

虞夏書に見^はれ^たる政治經濟思想 法學博士 田島 錦治
 階級の動學的考察 文學博士 高田 保馬
 獨逸最近の社會學論 文學博士 米田庄太郎
 植民地の經濟政策に就きて 法學博士 山本美越乃

時 論

不景氣と租稅 法學博士 神戸 正雄

說 苑

一子相續制度に就いて 經濟學士 八木芳之助
 客觀的勞賃論の史的發展 經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西田幾太郎) ○戸田博士を憶ひ
 て(福田櫻三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上應) ○戸田
 博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪
 市勞働調査事業(關 二)

追憶の斷片

河上肇

戸田博士の學風を品騭し學問を評價するには、他に人が在るであらう。私が茲に述べやうと思ふことは、私が博士との個人的な學問上の交際において感じてゐたことの一端である。

博士はよく他人に『講釋』をされる方であつたと思ふ。私が京都帝國大學の講師を囑託され、始めて京都に住むやうになつたのは、明治四十二年九月のことであるが、その頃博士は已に腸の故障を感じて居られたけれども、まだ中々元氣であつた。よく二時間以上三時間にも亘る散歩をされてゐた。さうして私はしばしば博士に誘はれて、その散歩の伴をした。山へ登つたことも屢々ある。銀閣寺の横手から大文字山へ登り、それから大津へ下りたこともあり、都ホテルの側を登つて、將軍塚から清水の方へ抜けたこともある。體力の弱い私は、何時も喘ぎ氣味に後からついて歩いたが、博士はこの散歩の途

中、よく私に向つて學問上の『講釋』をされてゐた。

博士の宅へ訪問したことも度々あるが、何時も坐につくと、大概二時間以上三時間近くまで、講釋を聽かされた。

私が會話を交へたと言はずに、講釋を聞いたと言ふのは、博士が何か話を始められると、それが一通り完結するまでは、私は只だその話を聽いてゐるばかりで、自分から積極的に話を持ち出す機會を有し得なかつたからである。博士の話は、何時も學問上または國策上のことで、その題目の多くは、博士自身が其の時自ら問題とされてゐたもの、もしくはは一應の解決をされた當坐のものであつたやうに思ふ。それは決して途切れ／＼のものでなく、先づ序論があり、序論が済んでから本論に入り、さうして其の本論の中では、先づ自家の所見を述べ、次いで之に對する反對論を假想し、一々之が駁論をなし、最後に結論に到着する、と云つたやうな調子で、甚だ系統的なものであつた。しかし其れ

が奇妙に段落なしに連續してゐて、糸を曳いたやうに切目がなかつた。だから其れを聽くには、相當に注意力を緊張してゐなくてはならず、なか／＼骨が折れた。こう云つた場合の博士の態度は、一段高坐に上ぼつて居られるやうな感じであつた。博士は相手の批評を求められるのではなくて、相手を説服し又は教化しやうとされてゐたやうだ。博士を私宅に訪問した者の中には、博士の此の流儀の講釋に閉口した者もあらうし、興味を有つた者もあらうし、感服した者もあらうが、私自身は其れから少からぬ利益を得てゐたので、——尤も私は多くの點において博士の學風にも學問にも絶對的の賛成を捧げることが出来なかつたが、——喜んで博士の講釋を聽いた。かくて私は博士と『會話』した經驗よりも、その『講釋』を聽いた機會の方を、遙により多く有つた。

博士が百萬遍に自宅を構へられてから、博士の運動は邸内における花卉の栽培に集中されるやうになり、私は博士と共に散歩する機會を失

ふやうになつた。それと同時に、博士の健康は、甚だ緩漫にはあるが次第くゝに衰へるやうになり、終には博士が其の咽喉を害せらるゝことになつたため、私は博士の講釋を聴くことを遠慮せねばならなくなつた。昨年の初夏の頃であつたと思ふが、博士の病氣が既に大分進んでゐた頃、私は久しぶりに博士に會つて、約二時間ばかり社會政策の話聞いた。後で聞くと、そのため直ぐに發熱されて暫く臥床されたさうで、それ以來私は、見舞には出ても、博士自身には面會を求めぬことにした。今歲三月五日の午後、久しぶりで博士の顔を拜したが、博士の靈はその時既に天に歸してゐた。超えて七日の午後、阿彌陀峯において煉化造りの煙突から舞ひ上がる黒煙を見た時は、寒い風に雪が混つてゐた。